



おさがり

皇學館大学教育学部2年 飛田大河

「また、兄ちゃんのやつかよ。」と、わかりやすく、ため息をつく。

三兄弟の一番下、次男とは六歳、長男とは九歳離れている。新しい物、その時の流行などは関係なく、何もかもおさがりだ。同級生の皆はピカピカの新品なのに対し、埃被っていた所を引っ張り出してきた物が自分にとっての新品だった。部活や塾、受験や就職活動を支え、金銭面からみても男三人を育てるのは、大変だ。幼いながらも十分理解していた。仕方がないのだ。兄と同じ学校、同じ部活、同じ道で同じ物を使う。まさにずっと兄の後ろを歩いている三男の姿がそこにはあつただろう。兄は夜遅くまで部活や塾で帰りも遅い、大学は県外へと、正直全然知らない。あまりにも大きく遠すぎる存在である。そのような兄達との繋がりを感ぜられる唯一の物がおさがりだった。不満を口にして、グズグズ言うがただの照れ隠しであり、おさがりは心から嬉しかった。文句を言い、不機嫌を装うが、毎日毎日大切に使った。

自分にとって兄は今も憧れで、常に見上げる存在である。ずっと大きな目標だ。皆とは違い、古くなった物が、宝物のように輝いて見えた。一回り大きな服、縫って誤魔化した筆箱、傷ついたリュックサック、どれをとつても大切な宝であつた。もちろん、ただ使わなくなった物が回つてきているだけだが、兄からのプレゼントに思い、嬉しかった。根っからの三男坊だと自負している。

もう大学二年生。おさがりと共に過ごしてあつという間の日々だった。散々使い倒したために出番がなくなったものばかりだ。

「また、兄ちゃんのやつ使ってるの。」

そう言われるが、兄に追いつくため、今日も古くなった宝を持って行く。